

大雪山の昆虫研究覚え書

渡 辺 千 尚

大雪山の昆虫研究が本格的に開始されたのは、一九二六年以後のことである。もともと、それに先き立って一九一一年よりたびたび大雪山に登り、地形や植物を研究して、大きな業績を残した小泉秀雄は昆虫類をも調査している。そして同氏の著書「大雪山、登山法及び登山案内」(一九二六年発行)に大雪山の森林帯と寒地帯に生息する昆虫の目録を掲載しているが、これが大雪山の昆虫類をまとめた最初の記録である。ただしこの目録に登載されている種類の中には種名の同定が不確実なものがあって、学術上高く評価されていない。

たまたま一九二四年に創立された大雪山調査会は大雪山の地質、地形、植物、動物、気象、天然記念物、史蹟名勝、開山沿革、地名、登山路、登山準備などに関する事項を各専門家に委嘱して、活発な調査を開始した。

昆虫類については、北海道大学農学部昆虫学教室が主体となり、教授松村松年をはじめとして、内田登一、河野広道が調査委員となって調査研究をすすめることになった。そして一九二六年夏の実地調査で、高山帯にて数々の学術上貴重なチョウやガを発見して、画期的な成果を収めた。これらの新たに発見した高山性のチョウやガに関する論文が発表されると、学界に大センセイションを巻き起こし、大雪山の高山昆虫相は突如として脚光をあびるにいたった。これらの論文は創刊もない昆虫学の専門雑誌『Insecta Matsumurana』に左記の題目のもとに登載された。

Matsumura, S. New and unrecorded butterflies from Mt. Daisetsu. *Ins. Mats.* 1 (2) : 103-107, 1926.

A list of moths collected on Mt. Daisetsu, with descriptions of new species. *Ins. Mats.* 1 (3) : 109-119, 1927.

Geometrid-moths collected on Mt. Daisetsu, with descriptions of new species. *Ins. Mats.* 1 (4) : 182-187, 1927.

第一の論文には、大雪山の高山帯にて発見された六種の高山チョウが記載されている。大雪山の高山昆虫相の立役者とも称すべき、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネヒカゲがここに始めて登場している。第二、第三の論文には大雪山の山麓から高山帯にいたるまでの地域で採集した大ガ類約一八〇種が記録されている。その中には、新たに発見された高山性の大ガ類が十種ほど含まれている。

大雪山のわが国に比類のない特異な高山昆虫相が世に喧伝せられると、全国の昆虫学者、昆虫同好者が続々と大雪山を訪ずれ、年毎にその数を増してゆき、あたかもわが国の昆虫採集のメッカの観を呈した。そして大雪山の昆虫相は各部門にわたって、次第に新知見が加えられて、今日にいたった。ここに大雪山の昆虫類のうち、比較的研究がすすんでいるチョウ類、大ガ類、甲虫類について、いささか触れてみることにする。

チ ヨ ウ 類

大雪山の昆虫類のうち、最もよくわかつているのはチョウ類である。すでに河野広道は一九三〇年に「大雪山の蝶類」(*Zephyrus* 2 : 214-226, 1930)と題して、四七種を挙げ、その解説をこころみている。しかしなんとしても、もっとも興味を引くのは高山帯にのみ生息するウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネヒカゲ、タモマンニヒカゲ、カラフトルリシジミ、カラフトタカネキマダラセセリの六種の高山チョウである。なかでも最初に挙げた三種は大雪山の高山昆虫相を特色づける珍しい種類である。

ウスバキチョウは東北アジアの平地(アムール、ウスリー、



北満州) 北朝鮮の高山(白頭山)、北米のアラスカに分布する純然たる寒冷地のチョウである。日本では大雪山の高山帯にのみ生息し、幼虫はコマタサを食草とする。

アサヒヒョウモンは最初、北米の北部寒冷地に生息するヒョウモンチョウの一種を近縁とする大雪山特有の独立種として記載された。その後の研究の結果、現在では北欧のスカンジナビヤ半島、シベリヤ、北米の北極周辺の寒冷地に住む純然たる周極種である *Glossiana freija* の一亜種としてとり扱われている。このチョウが極地周辺を離れて大雪山の高山帯に独りぼつんと分布していることは、氷河時代の落し子の感が深く、生物地理学上注目すべきことである。幼虫は食草は大雪山ではキバナシヤタナゲとされているが、さらに研究の余地があるように思われる。

ダイセツタカネヒカゲは大雪山の特産種とされていたが、最近、日高山脈の幌尻岳の高山帯からも発見された。本種に近縁の種類は北極周辺の寒冷地、北半球の諸高山に見られる。幼虫は大雪山にてダイセツイワスゲ、ミヤマタロシゲなどの高山性のカヤツリグサ科の植物を食草としている。

なお、ウスバキチョウと同属 (*Parnassius*) のアカボシウスバシロチョウ (トムラウシ岳) とオオアカボシウスバシロチョウ (十勝岳) の二種の高山チョウが大雪山系から採集されたという記録がある。しかしいづれも唯一度の記録に止つていて、果して両種が大雪山系に定着しているものか、その信偽のほどはまだ判然としない。いかなれば「幻のチョウ」というべく、今後の調査研究を待つばかりではない。

近年わが国のチョウ類研究の鋒先は成虫ばかりでなく、卵、幼虫、さなぎのような幼生時代の形態や生活史、食草などの生態に向けられている。大雪山の高山チョウに対してもこの方面

の研究が行われて、かなりの成果を収めている。すなわち、すでにウスバキチョウやダイセツタカネヒカゲなどはその幼生時代の形態、生活史、食草などが明らかにされた。ただアサヒヒョウモンやカラフトトリシジミは、まだ研究の余地を残している。このような研究は不便な山小屋に長期滞在して、高山のいろいろな悪条件のもとで観察、実験、飼育などを行わなければならない、なかなか根気を要する仕事である。その成果にはチョウ類の研究に熱心な昆虫同好家に負うところがはなはだ多い。

大ガ類

大ガ類はチョウ類とは比較にならぬほど種類が多く、大雪山の全域からかなり多くの種類が記録されているが、今後の研究によってさらに種類が増すことであろう。大雪山の大ガ類のうちでもっとも興味あるのは、高山帯にのみ生息する真正の高山性の種類である。現在までの研究によってダイセツドクガ、ダイセツタカネダシヤタ、コイズミヤガをはじめとして、全部で十三種が知られている。これらの種類は北極をめぐる寒冷地に生息する、いわゆる周極種と同一か、あるいはその亜種であるのが大部分を占めている。この事実は大雪山がいかに生物学的に周極地域と深い関連のあるかを如実に示し、大雪山の生物地理学的考察に好個の資料を提供しているものといふべきであろう。なお高山性の大ガ類の幼生、食草、生活史などについての研究は、まだ今後の課題として残されている。またこれら高山性の大ガ類の中には屋間に活動する種類がある。この習性の研究も興味ある問題である。

甲虫類

大雪山の甲虫類は、チョウ類や大ガ類とともに比較的良好に知られている。早くから各科の甲虫が記録されていて、すでに一

九三六年に河野広道は「大雪山の甲虫類」(Biogeographica 1 (2): 75-104, 1930)と題して総合目録を発表している。この論文には一八二種の甲虫が大雪山より記録され、高山帯にはダイセツオサ、キタアラメゴミ、アラガネコメツキなどの高山性甲虫が生息することを報じている。その後多くの甲虫学者によって、かなりの種類が大雪山の甲虫相に加えられている。ここに特記すべきは、近年にいたって十種ほどの真正の高山性ゴミムシ類が高山帯に生息する事実が明らかになったことである。その中にはキタマルタビゴミやヒメミヤマメダカゴミのように明らかに周極種と認むべき種類が含まれていて、ここにも大雪山と周極地域との密接な関係をうかがうことができる。

もちろんこれまで述べたチョウ類、大ガ類、甲虫類以外の昆虫類についても、研究が行われているが、紙面の都合もあって、ここでは割愛することにする。実際、大雪山で得られた昆虫を取り扱った論文はかなりの数に上り、発表された新種や本邦未記録種は少なくなく、昆虫学界に貴重な新知見が加えられている。たとえば直翅目の中のきわめて原始的なコオロギモドキ科の一新種(エゾガロアムシ)が、大雪山旭岳の中腹ニコマンベツ温泉附近から発見されたこともその一例として挙げる事ができる。しかし大雪山の昆虫相は、わずかにその一端が明らかにされたに過ぎなくて、研究はこれからであるという感が深い。じつに大雪山は昆虫類の宝庫であり、その昆虫相の研究ばかりでなく、高山性昆虫類の生態学的研究、生物地理学的考察にも絶好な場所であるといっても過言ではない。研究は今後あくまで促進して、大いなる成果を挙げることを期待してやまない。だがこのかけがえのない昆虫相、とりわけ高山昆虫相をそこなわないように研究をすすめるのが、研究者の義務であると思う。研究に名をかりて勝手な行動をとったりすることは十分

に慎しまねばならぬし、また研究に必要な入山などの諸手続きもゆるがせにせず、慎重な態度で研究に従事すべきである。

稿を閉じるにあたって、大雪山の高山昆虫の保護対策について一言したいと思う。保護対策は、次の二つに大別することができる。その一つは、高山帯における昆虫類の採集禁止や乱獲防止である。すでにウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツカネヒカゲ、カラフトルリシジミの四種の高山チョウは特別天然記念物に指定され、採集禁止が実施されているが、さらに他の種類にも及ぼし、強化すべきであろう。また昨今、昆虫ブームの波に乗って、乱獲をこととして、自己の蒐集欲を満たす輩が横行しているので、この点には十分な警戒が必要である。その他の一つは、生息環境の保全である。いくら採集を禁止し、乱獲を防止しても、生息環境が破壊されてしまえば、昆虫類の生存する可能性は失われてしまう。最近ますます増加する登山者による環境の破壊は、目に余るものがある。それに加えて、自動車道路や観光施設の開発は環境破壊に拍車をかける結果となっている。生息環境の保全対策は、目下最大の急務であると考えられる。

(札幌静修短期大学)